

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

和田永 アーティスト / ミュージシャン
Ei Wada / Artist / Musician



CREATOR^{NO} INTERVIEW 101

和田永 Ei Wada

1987年生まれ。アーティスト/ミュージシャン。物心ついた頃に、ブラウン管テレビが埋め込まれた巨大な蟹の足の塔がそびえ立っている場所で、音楽の祭典が待っていると確信する。しかしある時、地球にはそんな場所はないと友人に教えられ、自分でつくるしかないと今に至る。オープンリール式テープレコーダーを楽器として演奏するバンド「Open Reel Ensemble」主宰。2015年よりあらゆる人々を巻き込みながら古い電化製品を電子楽器として蘇生させ合奏する祭典を目指すプロジェクト「エレクトロニコス・ファンタスティコス！」を始動させて取り組む。

No 101 和田永 アーティスト / ミュージシャン

EI WADA / Artist / Musician

クリエイターインタビュー

『見る人もハッピーになれる子どものデザイン展を六本木で』

機械ができること、人間ができること。
ギリギリのせめぎ合いが面白い。

update_2019.2.13 / photo_yoshikuni nakagawa / text_akiko miyaura

ときにオープンリール式テープレコーダーを楽器として操り、ときに古い電化製品を電子楽器として蘇らせ、自らの体を使って音を表現する和田永さん。音楽とアートの領域でつくり出す唯一無二の作品、パフォーマンスで注目を集める和田さんは、2019年2月21日から行われる TOKYO MIDTOWN × ARS ELECTRONICA「未来の学校祭」への参加も発表されました。ものづくりの原点と「未来の学校祭」で表現したいパフォーマンスについて、そして役目を終えた家電とテクノロジーで生み出す独自のアートを通じて、今後向かいたい場所を聞きました。

自分の体の動きと音が連動する体験が、いまの原点。

僕は、主に古い家電を楽器に蘇らせて、それを使ってパフォーマンスをしているんですけど、それは子どものころからの妄想が原点になっているんです。たとえば、遠い放送局の電波を拾ったときの不安定なザーツという雑音を聞いたり、ブラウン管に映る砂嵐を見たりしたときに、ラジオやテレビは人が知覚できない何かを感知する装置で、その向こうには謎めいた世界が広がっているように感じていました。僕の造語で言うところの「異界情緒」です。それって、割と共通の感覚だと思うんですよ。ただ、僕の場合は、「電気の妖怪がいそうだな」という妄想が広がって、次第に重症化していった（笑）。いまやっているパフォーマンスは、そこから広がり続けているパラレルワールド的な世界観を具現化している感覚でもあるんですよね。

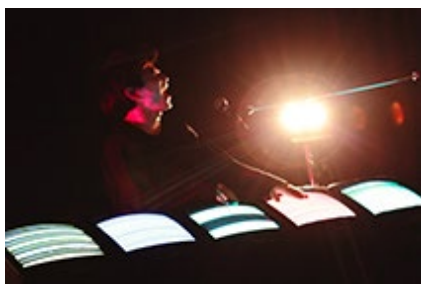
家電を楽器に変えるきっかけになったのは、中高生のころにいじっていたオープンリール。モーターが壊れて手で回したときにこれまた時空がゆがんだような摩訶不思議な音が鳴って、それこそ知らない国の楽器に出会ったような衝撃がありました。同時に、自分の体の動きと音が連動する体験をしたわけです。初めてギターの弦を弾いて、ジャーンと音が鳴ったときのような感覚でした。その後、「Open Reel Ensemble」の結成につながっていきました。

そして 気づいたら、ブラウン管を叩いていました（笑）。僕がつくった楽器に、『ブラウン管ガムラン』というものがあります。簡単に言うと、ブラウン管テレビから出る静電気を手で拾って、足に巻いたコイルを通してギターアンプにつなぐと、体がアンテナになって音が鳴るというもの。よくインタビューで、「何でブラウン管を叩くことになったんですか？」って聞かれるけれど、もう細かい記憶がないんですよね。静電気を拾って音が鳴るとわかってから記憶が飛んでいて。気づいたら無我夢中でブラウン管を叩いていました（笑）。



オープンリール

リールに磁気テープが巻かれた機械で、カセットテープ登場以前に録音メディアとして使用されていた。和田さんはオープンリール式テープレコーダーを楽器として演奏するグループ「Open Reel Ensemble」のメンバー。吉田悠氏、吉田匡氏と3人でリールやテープに直接手を触れながら演奏を繰り広げ、コンピューターとも組み合わせながら新たな音楽をつくり出している。ISSEY MIYAKE のパリ・コレクションの音楽も担当。



ブラウン管ガムラン

ブラウン管テレビから出る静電気を手で拾い、足につけたコイルを通してギターアンプに伝えることで音が鳴る、和田さん発案の電磁楽器。画面に映る縞模様によって音色と音程が変わり、画面に手が触れる面積で音量を調整し、リズムカルに叩くことで打楽器として演奏する。この楽器によるソロパフォーマンス「Braun Tube Jazz Band」では、「第13回文化庁メディア芸術祭 アート部門 優秀賞」を受賞している。

Photo by Mao Yamamoto

東南アジア、中東で目の当たりにした電気の魔術性。

小さいころに見た海外の光景からも、大きな影響を受けていると思います。自分のなかで、いまに至るまでのフェーズがいくつかあるんですけど、その第一段階が幼いころに両親と行ったインドネシアで見たガムラン。第二段階は大学時代にベトナムの寺院で、仏像がピカピカ光っている光景を見たことですね。更に蛍光管が明滅する中でお坊さんがエレクトリックな弦楽器を奏してお経のようなものをマイクで歌っていました。音はバリバリに歪んで。おかしくないですか？（笑）ある種、映画のような世界がリアルな日常にあって、そのときに電気の魔術性というものを目撃した気がしました。

楽器という面で衝撃を受けたのは、トルコに行ったときに会ったエレクトリック・サズ。サズは現地の伝統的な弦楽器で、本来はアコースティックなのですが、エレクトリック化されたものがあるんですよ。" 微分音 " という白鍵と黒鍵の間の音が鳴るんですけど、聴けば一発でアラブの音だとわかる独特な音階で、それですごくサイケデリックな音楽を奏でるんです。ちなみにモスクからラウドスピーカーで街に流れる、礼拝時間を知らせる歌は、これまたバリバリに割れていました（笑）。テクノロジーがすごくマジカル、かつミラクルな印象として残りました。電気電子的な楽器って宇宙を表現する楽器として歴史的に使われてきたと思うんですけど、電気的かつローカルなものって「異界情緒」と「異国情緒」が合体している謎の魅惑があるんですよ。

僕が家電を楽器にするときは、家電そのものが持っている説明書に載っていない力を引き出すことから始まります。「え !? お前、そんな得意分野あるの？」みたいな。家電としてリタイアしたもので、要は定年後なわけですよ。でも、実はすごくアクロバティックなおじいちゃん、おばあちゃんだったという感じかな。それで、「じゃあ、これやってみない？」って誘ってみるんです。「才能あるよ！ 楽器になれるよ！」って。転職のススメですね。



和田永 アーティスト / ミュージシャン
EI WADA / Artist / Musician

update_2019.2.13 / photo_yoshikuni nakagawa / text_akiko miyaura

人がつながり、電気がつながり、心をつなげるパフォーマンス。

2015 年からはエンジニアをはじめ、たくさんの方々といっしょに電子楽器を創作して、合奏する「エレクトロニコス・ファンタスティコス! (以下、ニコス)」というプロジェクトをスタートさせました。2 月 21 日から始まる TOKYO MIDTOWN × ARS ELECTRONICA「未来の学校祭」に、僕も参加させてもらうのですが、今回はその「ニコス」としてパフォーマンスします。



エレクトロニコス・ファンタスティコス!

和田さんが中心となり、古い電化製品から新たな電子楽器を創作、量産し、奏法を編み出して、徐々にオーケストラを形づくっていくプロジェクト。通称 "ニコス"。現在、東京・日立・京都の3か所を拠点に活動を続けている。普段は電気メーカーに勤めるエンジニアや、ミュージシャン、デザイナー、祭り好き音楽好きが集い、日々妄想や知恵や技術を交換しながらものづくりを続けている。『KENPOKU ART 2016 茨城県北芸術祭』、東京タワーの真下で行われたニコスの祭典『本祭Ⅰ：家電雷鳴篇』など、さまざまな場でパフォーマンスを繰り広げている。

Photo by Mao Yamamoto

「未来の学校祭」では、先ほどお話しした『ブラウン管ガムラン』を使って、その場にいる人々とともに " 通電の儀 " を執り行いたいと考えています。" 通電の儀 " は、ブラウン管から拾った静電気を人が手をつなぐことで伝えて音を鳴らす創作セレモニーです。僕のライブから始まって、最後は会場全体を楽器にしていきたいなど。

しかも、パフォーマンスをする東京ミッドタウンのアトリウムは吹き抜けになっているので、下の階と上の階を音のレイヤーに見立てていくのもいいかなって考えています。言うならば人がつながり、電気がつながり、心をつなげるパフォーマンス（笑）。そんな " 通電の儀 " が、未来の学校のギリギリな朝礼ということで！



TOKYO MIDDTOWN × ARS

ELECTRONICA「未来の学校祭」

「アートやデザインを通じて、学校では教えてくれない未来のことを考える新しい場」をコンセプトにした新たなイベント。「アルスエレクトロニカ」との共同プロジェクトで、今回は 2018 年にオーストリア・リンツで開催された「アルスエレクトロニカ・フェスティバル」の参加作品を紹介するほか、東京ミッドタウンを舞台に「ギリギリ」をテーマに展示、パフォーマンス、ワークショップ、トークの 4 つのプログラムを用意。

【日時】2019 年 2 月 21 日(木)～2 月 24 日(日)

【時間】11:00 ～ 21:00

【場所】東京ミッドタウン各所

http://www.tokyo-midtown.com/jp/event/school_future/

同時に、それが一種の踊りにもなるといいなとも思っているんです。踊りのなかに演奏を包括することは、僕自身常に探索していること。今回は " 祭 " という名のイベントなので、リンクするんじゃないかと思っています。

祭と言っておきながら 最初は「ギリギリ」という今回のテーマのほうが目飛び込んできました。でも、ギリギリというワードも僕のやっていることにつながるんです。役目を終えた家電をどこまで転生させられるか、極限までどう可能性を広げられるかに挑戦しています。それと「ニコス」は、さまざまな人を巻き込むことで生まれる偶発性を大事にしていますね。人と人との間でギリギリが共有されたとき、爆発力みたいなものが生まれる瞬間があるんですね。

自分の体と音がつながる。その間に道具として存在する楽器。

僕自身のギリギリは、またちょっと違う話になるかもしれない。そもそも常に綱渡りだし（笑）、つくったり演奏するときもギリギリにアイデアが浮かんで、直前までできることを模索しているし。あと、自分の体のギリギリに挑戦している感覚もありますね。僕たちは生身の人間がライブ演奏しているので、自分の体をどこまで音楽にしていけるかっていうことがやっぱり大事。

そもそも楽器の真価って何かと考えたとき、音楽を奏でるという意味においては、今やすべてコンピューターで演奏しても成り立つんです。それこそ曲自体をどんどん機械が考える時代になっていくだろうし、リスナーとしてはどういう形であれ、極端に言えばいい曲が聴ければいいですね。でも、プレイヤー側が本当に音楽を楽しもうと思ったら、自分の体と音がどうつながるかっていうことが楽器に希求される。テクノロジーが進歩する一方で、人が介入しなくなったらプレイヤー的に退屈になってしまうテクノロジーが楽器だとすると（笑）、機械と生身の人間のある種のせめぎ合いがここに宿っていますね。その実験と挑戦の対象が何でも家電なんだっていう話ですけどね（笑）。ただ、僕は家電が現代における民族楽器になり得るとガチで確信しています！

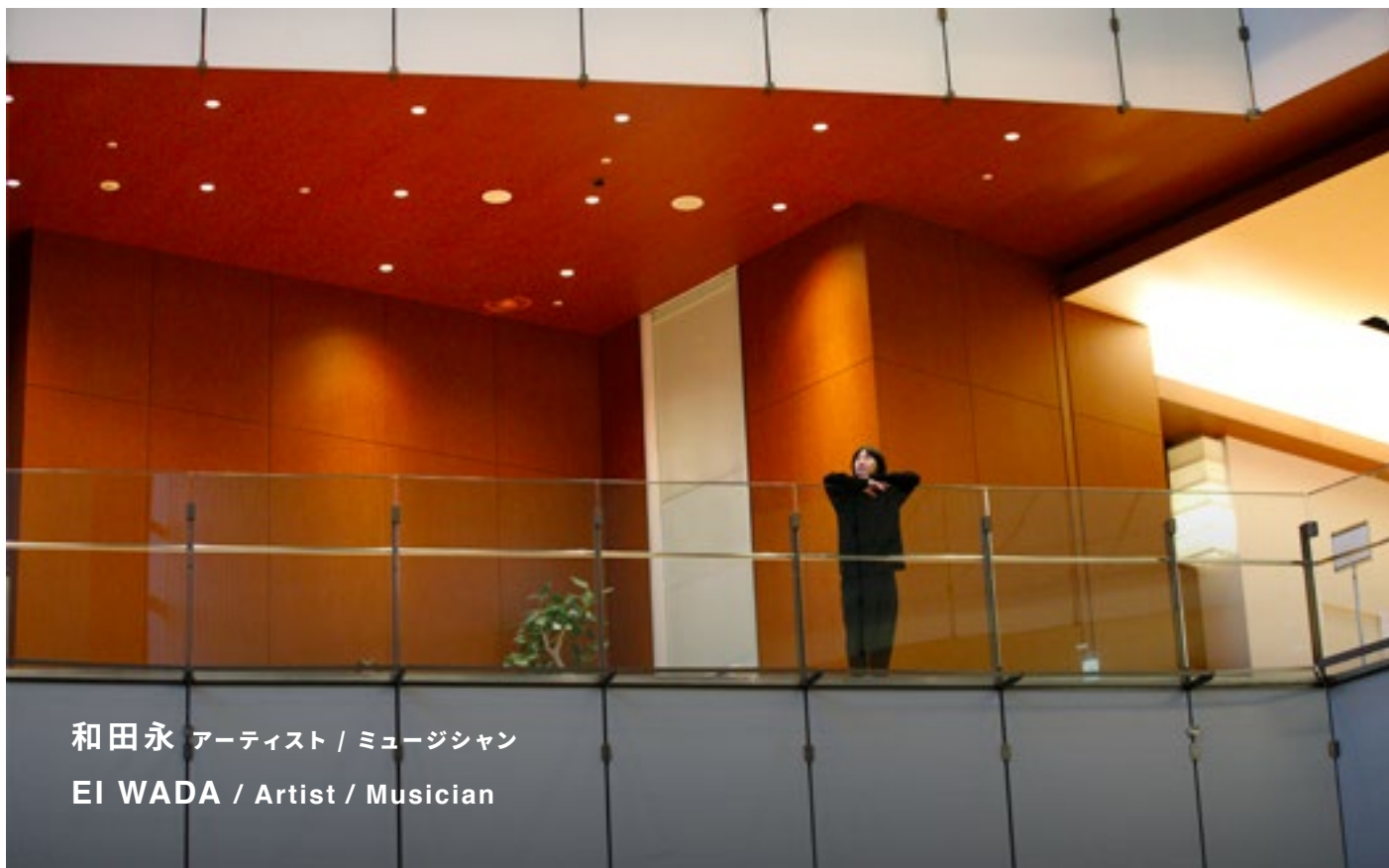
そういうギリギリのせめぎ合いも含め、「未来の学校祭」では実験的なことをしたいですね。もし うまいかなかったら、すみません！（笑）でも、何かしらおもしろい時間と空間が立ち現れるんじゃないかと、僕自身も楽しみにしています。

身近にあるもの、生活と結びついたものから音楽は生まれる。

楽器をつくりたい、パフォーマンスをしたいという衝動が生まれるときって、自分が思い描く世界観を形にしたいということと結びついているんです。やってみたいのは、“電磁パンク”という世界観ですね。

蒸気機関が過剰発展した世界を舞台にした物語を“スチームパンク”、インターネットがとにかく社会の隅々まで過剰発展した未来を舞台にした物語を“サイバーパンク”って呼ぶじゃないですか。それと同様に磁石とか電気、電波、電子、電磁のテクノロジーが過剰発展したときに生まれる物語、民族音楽が“電磁パンク”としてあり得るんじゃないかなって。

その電磁パンクの世界で使っている楽器は、もちろんブラウン管や扇風機（笑）。基本的に土着的な音楽が根源的に生まれる瞬間って、生活と結びついていると思うんです。身近にあるモノを叩いたり、弾いたりするなかで音を見つけ、さらに弾いた弦の長さが違うと、音程が変わることを発見して音楽になっていく、みたいな。僕たちが電磁的な発音原理を見つけて、楽器にしていく過程も似たようなものだと思うんです。そしてあらためて思ったのは、身近にあるテクノロジーって、実は楽器としての機能を秘かに備えているのかもということでした。



update_2019.2.13 / photo_yoshikuni nakagawa / text_akiko miyaura

パフォーマンスは映画を撮っているのと同じ感覚。

電磁パンクということだと、実は映画が撮りたいんですよね。いまパフォーマンスしていることって、僕にとっては映画のシーンをつくるのと似た感覚なんです。自分が監督で、見ているみなさんの目がカメラ、電磁パンクの世界にある楽器と暮らしている人々が出演者で、そこで奏でられる音楽がサントラ(笑)。夕方になると人々が『ブラウン管ガムラン』を叩いたり、『扇風琴』を弾き始めたりして、物語が展開していく……。「未来の学校祭」でみなさんを巻き込んでやることも、目の前で超高解像度にリアルに進んでいく映画のようなものだと思います。



扇風琴

扇風機に電球と穴の開いた円盤を取りつけ、回転によって起こる光の点滅を電気信号に変換して音を鳴らす楽器。ギターのようにストラップを取りつけて肩にかけ、回転を利用しながら演奏する。サウンドも、エレキギターのような音色。

Photo by Mao Yamamoto

そして、今回は電磁パンクの世界を六本木という街で表現するのですが、六本木でなんでもできるとしたら電磁神輿や電磁山車を通りに走らせて、" 電磁百鬼夜行 " をしてみたいですね。もし、街に置いていいなら " 通電キス " みたいなスポットをつくるのもおもしろそう。実は友人の結婚式で何かやってほしいと言われたときに、「通電キスでしょ!」って提案して、実際にやったことがあるんですよ。新郎・新婦がブラウン管を触って低周波を流してキスをした瞬間、ブビーーッって爆音になる装置をつくって。ふたりとも「すごくいい記念になった」と喜んでくれて会場もかなりホットになりました（笑）。

混沌とした場所にある不思議な文化に惹かれる。

僕は、中東やアジアのちょっと乱雑で、混沌とした街が好きですね。昨年3月に香港に行ったんですけど、特に路上カラオケ大会がすごくおもしろかったな。週末になると1キロほどある通りで、みんなが好き勝手カラオケをしているんですよ。何メートルかおきに PA システムがブワッと並んでいて、それぞれが歌っているというカオスな状況。さらにその周りをすごい数の人が囲んで、歌に合わせて踊り出したりするんです。観客は若い人からおじいちゃん、おばあちゃんまで、音楽はジャンルレス。なかにはちょっとアイドル的存在の人もいて、" 待ちました! " みたいな空気が流れるんですよ。他にも白鳥の格好をしてバレーしている謎の人がいたり、ひたすらマイケル・ジャクソンの曲を流しながら巨大な壺を頭にのせ続ける秘技を披露するおじいちゃんもいたり（笑）。

路上カラオケでは僕も1曲歌っちゃいました。曲を検索したら、スピッツの『楓』が入っていたので、思い切り熱唱というか絶叫（笑）。とにかくエネルギーに満ちていて、かなり衝撃的な光景でした。日本人はシャイだから「恥ずかしい」って思うかもしれないけれど、あの世界にいたら絶対に元気になると思います。あのカラオケ大会、六本木の路上でやったら、おもしろいんじゃないかな。

次の扉は開いた。ボーダレスな思考が新しい未来をつくる。

今後、家電楽器化プロジェクトで挑戦していきたいのが海外での活動。昨年、「アルスエレクトロニカ」（オーストリア、リンツ）のフェスティバルで、ライブと展示・ワークショップを実施したのですが、フェスティバルに来場しているいろんな国の人にワークショップとして家電楽器世界を体験してもらったんですよ。そのときに、電気信号が言語を超えて共通のコミュニケーションツールになっている感じがしたんです。これまでは、日本で「エレクトロニコス・ファンタスティコス!（以下、ニコス）」の活動を進めてきたんですけど、海外の方たちとのコラボレーションの可能性にも、手応えを感じました。



アルスエレクトロニカ

芸術・先端技術・文化の祭典として知られ、毎年行われるメディアアートイベント「アルスエレクトロニカ・フェスティバル」は毎回多くのファンがかけつけることでも有名。2017 年からはアルスエレクトロニカと東京ミッドタウンとの共同プロジェクトがスタート。イベント参加者とともに、未来の社会を考える。

具体的に、海外の現地にある電化製品を楽器にするプロジェクトを走らせたいなという話も出ていますよ。「アルスエレクトロニカ」の拠点であるオーストリア・リンツの蚕の市で素材を集めて、現地の方たちと一緒に楽器をつくるっていうのもやってみたい。その楽器を使って、みんなで1曲演奏するのが最初の夢ですね。すでにやりたいと言っている人たちがいるので、連絡先を交換して次につなげていこうという段階です。

リンツ以外にもいろんな国で楽器のつくり方や考え方をシェアしていきたいという思いもありますね。日本でもプロジェクトのメンバーとはつくり方を共有しているので、教えることにまったく抵抗はないんです。むしろ、「ニコス」ではエンジニアの参加メンバーたちが中心となって、僕以外の人が新たな楽器を次々と生み出している創造の暴走状態。僕が見つけたブラウン管は静電気で音が出る、扇風機の回転で音が出るという段階から、メンバーそれぞれがアップデートして、自分用の楽器をつくり始めています。みんなが自発的に作り始めている状況が生まれていること自体、次の扉が開いた感じがします。

そのタネがさらにいろんな場所に飛んでいったら、おもしろいと思います。たとえば、タイのどこそこの人が扇風機で楽器をつくっていると思ったら、トルコではまた違う誰かがブラウン管を叩いているとか。しかも、国や地域によって現地ならではの音になっている、みたいなの。そして、いろんな地域の人がつくった楽器を持ち寄って、何処かでセッションしたり、その場かぎりのバンドを組んだり、ファイル共有で曲をつくったりするのもおもしろいんじゃないかと思います。妄想するのは"国境なき電磁楽団"ですね。

取材を終えて

電磁を操るとだけあって、理系のキレた頭を持ちながらも、真逆の文系的なファンタジックな想像力と豊かな言葉を放つ人。複雑で単純な少年のような思考、とにかくすべてを楽しんで生きている姿勢、コロコロと表情を変えて大笑いしながら話す姿に、人としてのチャーミングさが垣間見え、和田さんの周りに自然と人が集まるのも納得できました。「未来の学校祭」で行われる"通電の儀"。和田さんなら、参加した人を全力で楽しませてくれることは間違いないな、とあらためて実感しました。(text_akiko miyaura)